

# 障害者スポーツ 爽快

2020年開催の東京五輪・パラリンピックに向け、パラリンピックの競技団体や自治体が競技の体験会などを開いている。幅広い層に魅力をアピールし、ファンを増やすことを目指している。

(小野仁)

山口県防府市で今月行われた車いすバスケットボールの体験交流会。東京パラリンピックに出場予定の女子日本代表の選手が公開競



技を行った。地元の中学生ら参加者約60人は、代表選手が低い位置からシュートを決める場面を間近で見ても歓声を上げた。

続いて、参加者は車いすの2年生、近藤優斗さんは「車いすでは思うように動けなかった。代表選手は動きが速く、車いす同士が激しくぶつかるので、びっくりした」と話す。

今回は代表合宿の機会を利用して体験交流会が開催された。日本車椅子バスケットボール連盟(東京)の塚本京子さんは「一般の人が車いすバスケットに接する機会が少なく、認知度はまだ高くない。実際に体験して、ファンになる人もおり、体験会を通じて競技の魅力をPRしたい」と話す。

協会(東京)では、企業向けの研修プログラムを提供している。アイマスクを着用する人が、着用していない人と声をかけ合いながら音が鳴るボールを追う。目の見える人(晴眼者)が務めるキーパーやコーラーと呼ばれるガイドが選手に声をかけながらボールを追うブラインドサッカーと同じような状況を設定している。

## 競技団体など体験会

## 「魅力知って」

実施する予定。

パラリンピックに向けてボランティアを養成し、競技を支える人材を育てようという試みもある。NPO法人「STAND(スタン ド)」(東京)は、今年11月から、ボランティアに関心がある人向けの講座を開き、パラリンピックの魅力を伝える。

代表理事の伊藤数子さんは、「競技のファンになって、パラリンピックを支えるボランティアになってほしい」と話す。

大阪体育大客員教授(障害者スポーツ論)の高橋明さんは、「障害者スポーツは、まず見て体験することが大切。障害者が持っている能力や可能性に注目すると、一緒に競技を楽しめることが分かる。そうした障害者への理解が人に優しい社会を作る大きなきっかけになる」と話す。

同協会事務局長の松崎英吾さんは、「違いがあることを理解し、生かしながら、社会や組織では大事だと体験してほしい」と話す。これまでこのベ47社が、この研修を実施した。研修への参加をきっかけに協会への支援を始めた企業もある。

自治体も体験会を開催する

中学生が代表選手に交じって車いすバスケットを体験した(山口県防府市で)

同同志社大教授(障害者スポーツ論)の藤田紀昭さんは、「パラリンピック競技をはじめとする障害者スポーツは、従来、リハビリ的